

卒論の準備していますか？

(2001年度卒論指導受講者用・限定版)

1. 関心

自らの関心が、やはり第一だと思います。人がやっているから、先生に勧められたからということもありますが、仮にそうであっても、自分自身の興味がなければ、なかなか前に進まなくなります。

ただし、「関心」「興味」も、たんなる「思いつき」の段階から、「テーマ」として主題化されていくプロセスを経る必要があります。「たんなる思い」から客観化され、言葉で他人に向けても、表現できるようになった段階へと、いろいろな思考実験を経て、「ひとつの主題」として扱うことのできる「自ら関心」ということになるのだと思います。「論文」ですから、文字と記号で表現される必要がどうしてもあります。これらで表現される時には、もともとの「思い」とは、どこかで食い違っているところがあるかもしれませんが、主観的な「思い」とはそういうものであり、「文字」「記号」での表現とはそういうものです。そして、この食い違いが、もしかしたらさらなる試行錯誤へのエネルギーを生んでくれるものです。

2. 調べるということ、そして調べた後

私の場合、最近では、まずインターネットで検索することにしています。それから図書館に行ったり、デジタル・カメラを持って現地に行くことにしています。図書館も大学、あるいは戸山図書館だけではありません。戸山図書館が使えないとか、大学の図書館が使えないとか、あれこれ聞きますが、それは調べる自分自身が使えないのか、よく考えてみた方がよい時もあります。使えない図書館についてこぼすよりも、使える図書館を探すことが重要です。最近では、外国の図書館の蔵書もインターネットで検索ができますし、その蔵書の複写もメールで注文ができるところが少なくありません。

ところで、重要なのは、調べた後に、何をやらなければならないかということでしょう。インターネットで何か見つけたら、ダウンロードする必要があるし、あとになってもわかるように、きちり名前をつけてフォルダーに入れるなり、プリントアウトしてファイルにはさんで整理することは当然です。

図書館で何かをコピーしても同じで、あとの整理が大切です。調査地で写真を撮っても、十分に整理をしていく必要があります。卒論指導の過程で、「先生、それ図書館で見つけました」ということをよく聞かされます。そして、それだけで満足してしまう人もいます。しかし、それをどれだけ利用し、整理できたかということが重要です。たくさん調べても、後になって、何が何だかわからなくなってしまうと、後悔だけが残るということになります。



こういうふうに、コピーが貯まり、そしてノートが貯まります。

3. 読む

私は、コンピュータを用いて「統計計算」も行いますが、やはり「読む」ことが仕事の基本だと思っています。あるものは細かく読み、あるものは斜めに読み、あるものは見るだけというふうですが、読まなければ始まりません。外国語のものについては、私の場合、英語とドイツ語のもので、後者が全体の8割ほどを占めています。時にフランス語のものも辞書をひきまくりながら読むこともあります。外国語のものについて、とくにこれは重要であると思うものは、昔ながらのやり方、つまり全部、日本語に訳してしまいます。まさに全部、訳します。「口語米語」全盛の時代と言われているかもしれませんが、私のように人格の形成のほぼ全部が、日本語の世界の中で成った者としては、この伝統的な方法が最も確実だと思っています。

4. 書き始める

いきなり、書くことは普通できません。例えば、ある筋に沿って、目次案のようなものが出来ているものです。これは、先に述べた「調べた後」の整理を、あれこれ考えながらやっているうちに、おぼろげに浮かんでくるものではないでしょうか？ 自分の関心が、実はこんなのだったのだと、かつての浅はかな自分に気づいたり、もっと新しい発見があって、「よし、これを文章にしてやろう」という気分が高まってくると、目次案が出来てくるように思います。

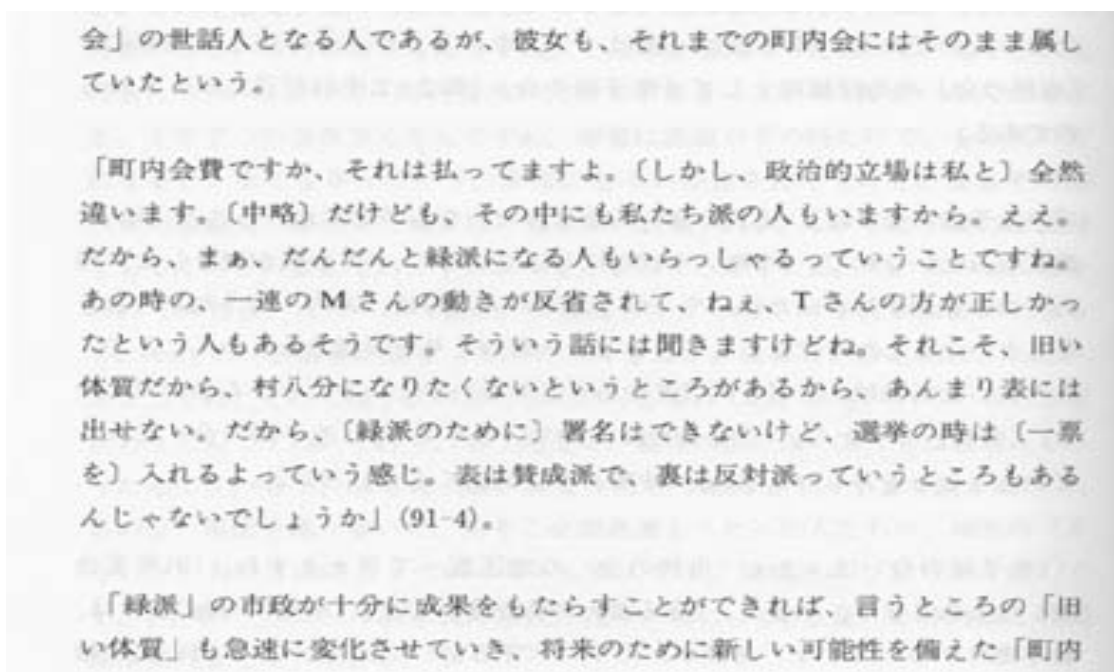


5. 本文と引用

既存研究の引用、インタビュー記録の引用など、いくつか種類はあります。既存研究について、私はだいたい次のような方針をとっています。

- 1) 日本語で書かれたものについては、非常に重要な部分、すなわち引用してその文章を示す必要がある場合だけ、引用します。普通はしないようにして、その箇所を指示することで用は足りると考えています。
- 2) 邦訳されたものについても同じです。邦訳書(論文)から、引用を多くするのは、多少見苦しさを覚えるので、極力しないようにしています。
- 3) 邦訳のないもの、邦訳はあるがあまりに問題がある場合には、訳して引用をすることにしています。

インタビュー記録については、文章化すると、喋っている調子やその場の雰囲気やそれをすべてそぎ落としてしまいますし、またあまりに短く切って引用してしまうと、コンテキストも不明瞭になりますので、かなり長く引用をすることがあります。



これは、インタビュー記録です。録音テープからそのまま起こしたものです。引用部分は、本文と分けて示してあります。()内は、インタビュー対象者番号です。

インタビューは、テープレコーダー、MDレコーダーをはじめ、今や種類豊富な手段がありますが、やはり文章化するのは、聞きながら、ワープロで打ち込むというやり方しか、今のところないようです。そのうちに、音声認識ソフトがさらに性能アップすればと願っていますが。録音をするために道具は、とりわけ社会学のような領域では、不可欠です。また、道具はいつも使っていることで、道具としての機能を十分に発揮させることができるものですから、いつもどこでも利用出来るように、日頃から、あれこれ録音をしているのも面白いことです。余談ですが、電車の中での録音なども、あとで聞いてみると、面白い発見ができることがあります。

次のは、外国語で書かれたもののを訳出して、引用したものです。今や、口語英語万能の時代ですが、やはり社会科学に関わっていると、ヨーロッパの言語をはじめ、種々の外国語を学び続ける必要のあることがわかります。英会話もできないのに、「二外」という人もいるようですが、私は反対だと思います。「文学部」のように、実学から離れた世界では、どうしても外国語に堪能になるということくらいは試みる必要があるように思います。

これは、Husserlのブラハ旅行記が1936年12月20日にフッサールに宛てた手紙からのものである。

「11月14日あるいは15日に、私はブラハに行くつもりです。フッサールは、そこで（以前に予定されていた四つではなく）二つの講演を行うつもりです。フッサールがラスナーに書いた手紙からは、彼の気分がずいぶん勝れず、あまりよくないとのこと。フッサール夫人から私への手紙では、私と若干のことについて打ち合わせしたいとのこと。フィンクのためのお金が到着しました。総額はまだわかりませんが、1000マルクだろうと思います^[124]。

この1000マルクとは何か、また手紙で示されている内容が具体的に何を示しているかは、現在残されている手紙類からは判断することができないが、フッサールのブラハ講演において、シュッツとカウフマンには、フッサールおよびその近くに居た人たちから、事前の連絡があり、彼らが事前の打ち合わせをしていたことが推測できる^[125]。

ブラハでの講演は、さらに拡充されて36年に、ベオグラードでアルトゥール・リーベルトが主宰していた『フィロソフィア』誌に掲載される^[126]。そこでの題目は「ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学——現象学的哲学序

[124] Husserl (1936b), ブラハでの講演は、現在知られている『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』の第1部と第3部Bと字句においても多く一致するものであり、その基礎となったものである (Smid (1993), S. XXII)。

[125] カウフマン、ルートヴィヒ・ランドグレーベ、ハンス・ラスナー、ニコライ・ロススキー、ヤン・バトチュカからも聴講者であった (Smid (1993) S. XXI)。

[126] Schutz (1959), p.87 [323]。

[127] Kaufmann an Schütz (011580)。

[128] スミドは次のように説明している。「ブラハへの旅行は、フッサールが夫人とともにブラハに移り住むことができるかを知るためのものであったと考えられる。さらにフッサールの遺稿をそこに救い出し、そこで研究することが考えられた」(Smid (1993), S. XXII)。

これは、未公開の手紙からの引用。原語はドイツ語でした。

上にある、Husserl (1936) というような文献挙示の仕方もあるいろいろな方法がありますが、とりあえずは、各自のやり方を研究してみるのもよいかもしれません。

6. 注

最近では、ワープロ・ソフトの機能が高まり、脚注をつけることも難しいことではなくなりました。脚注は、大いに利用する必要があります。

この内部対立について少し触れておくことにしよう。容認派は、その年、すなわち92年の初めから、候補者の調整に難航した。すでに見たように、容認派

- (1) 第1章第2節(21頁)および第5章第2節(207頁)参照。
 (2) 例えば『朝日新聞』(1992年11月9日)は朝刊第一面に「返子に女性市長」、『毎日新聞』(同日)は朝刊第一面トップに「返子、全国2人目女性市長」、『読売新聞』(同日)は朝刊第一面に「返子市長に女性のS氏」と報じ、いずれも「女性」であることを強調している。

注をつけるなら、脚注が、読み手には親切だと私は思っています。

力のもとに当時オーストリア第二の銀行ウィーン・バンク・フェラインとこれを合併させ、さらに10月初めには中部ヨーロッパ最大で、無論オーストリア第一のクレジット・アンシュタルトとも合併させる。クレジット・アンシュタ

- ¹⁸¹ Walter(1988), S.465.
¹⁸² しかし、その3年後、33年にはナチにより年金没取の上、退職させられ、ジュネーブの国際高等研究大学 (Institut Universitaire des Hautes Études Internationales) を経て、36年から38年までプラハ大学教授、その後、再びジュネーブで教鞭をとり、40年にアメリカに移り、42年までハーヴァードのロー・スクールで、その後カリフォルニア大学バークレーに移り、52年退職したが、73年のその死まで、学問研究に従事した [Walter(1988), S.466.]。なおレンナーをはじめ社会民主党は、戦後もケルゼンのウィーン帰郷を期待していた [Walter(1988), S.471, Note 24; Nasko(1982), S.103.]。
¹⁸³ 29年8月にはザンクト・ロレンツェンで防衛団の一揆により共和国防衛隊員が殺される。31年9月には、シュタイヤーマルク州の防衛団が一揆を起こすが、首謀者は無罪であった [Maimann/Mattl(1984), S.31 ff.]。
¹⁸⁴ Ausch(1968), S.308 f.
¹⁸⁵ Ausch(1968), S.321.

外国語の表示がある場合は、横書きがやはり便利である。

7. 図と表

社会学の場合には、とくに図と表、さらには写真を入れることが多くあります。これも、キャプションを入れる場所について、あれこれ約束があります。ただし、印刷スペースなどにより変化させられることもあります。知っておいてよい約束だと思えます。

表6-5 b) 郵送調査(調査IV)における1994年12月25日の市長選挙の地区別投票動向
 (89年のアンケート調査回答者(調査III)の場合)

	東権	S	U	H	総数
返子	16.0(12)	41.3(31)	5.3(4)	32.0(24)	75
久木	29.5(23)	39.7(31)	1.3(1)	29.5(23)	78
新権	22.5(16)	36.6(26)	4.2(3)	32.4(29)	71
池子	22.8(18)	44.3(35)	7.6(6)	24.1(19)	79

※この時の立候補者は5人であったが、本文に関連する主要な3人に限定した。

表6-5・・・というキャプションは上につけるようです。

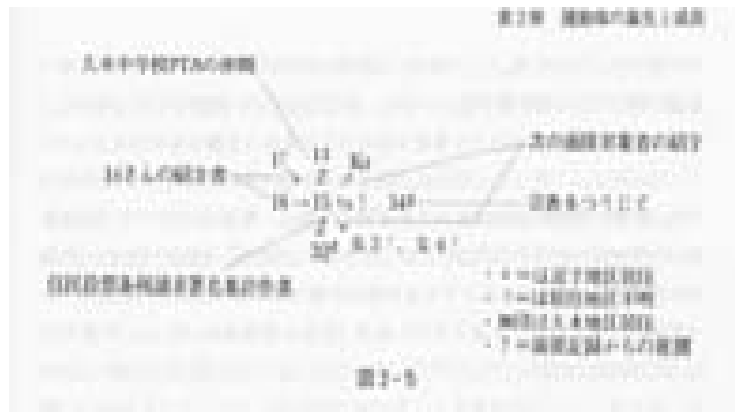


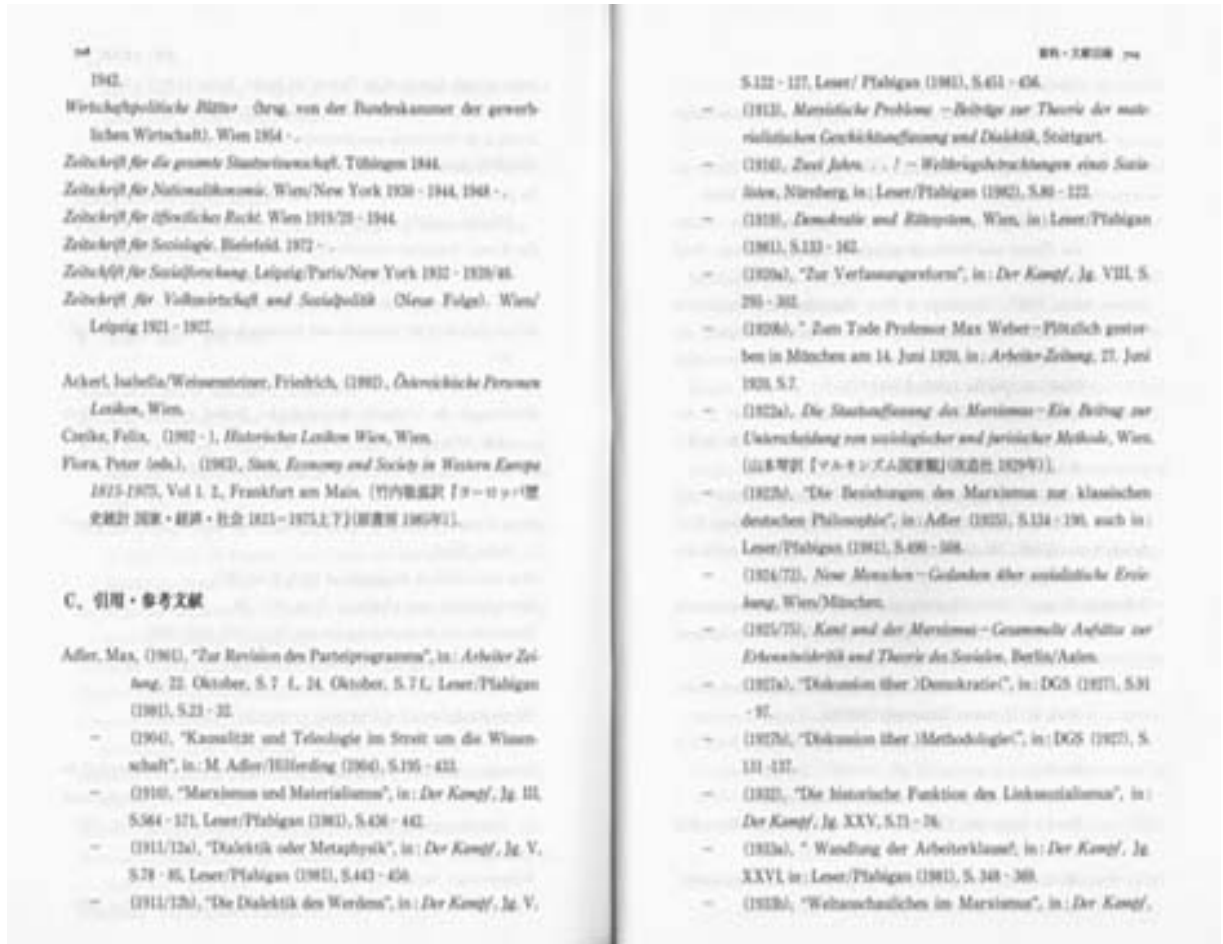
図2 - 5・・・というように、図の場合はキャプションは下にくるようです。



写真の場合も、やはり下に来ます。

8 . 文献表

文献表は、論文や本の最後につくものですが、「調べた後」の整理をしていくうちに出来上がっていくものです。「整理」をするということは、使うものと使わないもの、今使うものと、後で使うものというのを区別していくことです。文献表は、その主題のために、必要なリストのはずです。もちろん、これが出来るというのは、その主題のためには、使わないものをそぎ落としたということであり、「そぎ落とす」ことが大いにできるほど、調べる必要があるのです。



アルファベット順での記載

外国語の文献が多くなると、このようになるのでしょうか？ ただし、外国語の文献が多い時は、今やその論文は英語で書くべき時代です。

とは言っても、まだまだ日本では、日本語で表現するのが普通です。論文の書き方、文献表の作り方など、いろいろなガイド類があります。参考に、ちょっと立ち読みしてみるのもよいかもしれません。あるいは、大学にいる間に、つい間違えて？ 教科書として「超・専門書」を買ってしまったこともあるはずです。そのうちの1冊を開いてみて、文献表の作られ方、注の付けられ方などを見ても参考になるかもしれませんし、案外、いい加減であることがわかったりすることがあります。



アイウエオ順での記載

これらも、一定の約束はありますが、どうしてもこうでなければならぬというのは、必ずしもはっきりしていないところがあります。まずは、一定の約束をベースにして皆さんのやり方を考えるのがよいのではないのでしょうか？

最も重要なことは、その論文が、これらの文献や資料に基づいていることを示すことですし、また挙げられている文献や資料に基づけば、他の人も同じ結論を導くことができるということを約束するものだということです。その点では、逆に言えば、読んでもしない文献などは、一切挙げる必要はないし、文献の多い少ないは、それ自体、大きな欠点ではありません。むしろ、きわめて重要な文献1点だけが挙げられているだけでも、オリジナルな研究業績が不可能というわけではないと思います。

以上： 森 元孝 2001年3月15日